

新邸遺跡第2地点
西原大塚遺跡第4地点

発掘調査報告書

1987

志木市遺跡調査会

はじめに

志木市遺跡調査会

会長 金子 庄 三

文化財は私達の祖先が残してくれた貴重な文化遺産であり、先人の血と汗の結晶ともいえるこの業績を知ることは、新たな文化を創造していく上での絶好の道標となるはずです。それ故に、この文化財を保護し、後世に伝えていくことは、私達の使命であると言っても過言ではありません。

志木市は武蔵野台地の東端に位置し、荒川・柳瀬川に面した台地縁辺部には埋蔵文化財の包蔵地が分布しています。

首都近郊25km以内に位置する当市は、近年ベッドタウン化の現象が著しく、急速に宅地開発が進むなかで、埋蔵文化財を保護していくことは、重要な課題となっております。

ここに報告する2件の発掘調査は、共同住宅建設に伴う記録保存のため行ったもので、多大な成果を挙げ報告書としてまとめることができました。本書が埋蔵文化財に対する理解と認識を深めるとともに、志木市の歴史を学ぶ上で役立てば幸いに存じます。

最後になりますが、発掘調査から報告書刊行に至るまでには、埼玉県教育局指導部文化財保護課、志木市文化財保護委員会をはじめ多くの皆様のご指導とご協力を賜りました。ここに深く感謝申し上げます。

例 言

1. 本書は、埼玉県志木市柏町5丁目に所在する^{あらやしき}新邸遺跡（県No. 09-8）第2地点及び幸町3丁目に所在する^{にしはらおおつか}西原大塚遺跡（県No. 09-7）第4地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、志木市教育委員会の斡旋により志木市遺跡調査会がこれを受け実施した。
3. 本書の作成・編集は、志木市遺跡調査会が行い、執筆は、第Ⅰ章 佐々木保俊、第Ⅱ章遺物尾形則敏、他は佐々木が行った。
4. 本書の挿図版の指示は、以下のとおりである。
 - 縮尺は、各挿図版中に指示した。
 - 遺跡挿図版中の水糸レベルは、海拔標高を示す。また、ピット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。
 - 遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を表わし、その番号は遺物挿図版中のそれと一致する。
 - 遺構の略記号は、以下のとおりである。
J＝縄文時代住居址 Y＝弥生時代住居址 H＝古墳時代住居址
5. 発掘調査及び出土品整理・報告書作成にあたっては、以下の諸機関・諸氏に御教示・御援助を賜った。記して感謝する次第である。（敬称略）

埼玉県教育局指導部文化財保護課・志木市教育委員会・志木市文化財保護委員会・志木市史編さん室・志木市立志木第三小学校・会田 明・浅野晴樹・麻生 優・荒井幹夫・飯田充晴・梅沢太久夫・小出輝雄・肥沼正和・斉藤 稔・笹森健一・斯波 治・高橋 敦・中島岐視生・並木 隆・松本富雄

6. 調査組織

- 役員** 会長 金子庄三（志木市教育委員会教育長）
副会長 斉藤昭吉（志木市教育委員会事務局次長）
理事 神山健吉（志木市文化財保護委員会委員長）
井上国夫（志木市文化財保護委員会副委員長）
根岸正文（志木市文化財保護委員）
宮野和明（ ）
尾崎征男（ ）
理事兼事務局長 白砂正明（志木市教育委員会社会教育課長）
監事 田中義二（志木市教育委員会社会教育指導員）
服部一次（志木市立郷土資料館長）

事務局 清水孝平（社会教育課長補佐）

下河辺信行（社会教育課）

佐々木保俊（ ）

岩崎香代子（ ）

調査員 尾形則敏

7. 調査地点

新邸遺跡第2地点 志木市柏町5丁目2996-1 委託者 個人 面積 350㎡

西原大塚遺跡第4地点 志木市幸町3丁目3113-1 委託者 個人 面積 105㎡

8. 発掘調査及び整理作業協力員

新邸遺跡第2地点

小俣暁子・佐藤小夜子・村井京子・山科美智

西原大塚遺跡第4地点

木村恵美子・小俣暁子・佐藤小夜子・深井恵子・村井京子・山科美智

目 次

はじめに

例 言

目 次

図版目次

挿図目次

第Ⅰ章 新邸遺跡第2地点の調査	1
第1節 調査の経緯	1
(1) 調査に至る経過	1
(2) 遺跡の立地と環境	1
(3) 発掘調査の経過	2
第2節 検出された遺構と遺物	2
(1) 縄文時代	2
(2) 古墳時代	4
第Ⅱ章 西原大塚遺跡第4地点の調査	7
第1節 調査の経緯	7
(1) 調査に至る経過	7
(2) 遺跡の立地と環境	7
(3) 発掘調査の経過	8
第2節 検出された遺構と遺物	8
(1) 弥生時代	8

図 版 目 次

図版1 新邸遺跡第2地点	(上) 遺跡近景 (下) 調査風景
図版2	〃 (上) 縄文時代1号住居址 (下) 貝層
図版3	〃 (上) 古墳時代1号住居址 (下) 遺物出土状態
図版4	〃 (上) 縄文時代住居址出土遺物 (下) 古墳時代住居址出土遺物
図版5 西原大塚遺跡第4地点	(上) 遺跡近景 (下) 調査風景
図版6	〃 (上) 1号住居址 (下) 2号住居址
図版7	〃 (上) 3号住居址 (下) 1号住居址出土遺物
図版8	〃 (上) 1号住居址出土遺物 (中) 2号住居址出土遺物 (下) 3号住居址出土遺物

挿 図 目 次

第1図	調査地点と周辺の地形 (1/4000)	1
第2図	遺構分布図 (1/300)	2
第3図	1号住居址 (1/60)	3
第4図	1号住居址出土遺物 (1/3)	3
第5図	1号住居址 (1/60)	5
第6図	1号住居址出土遺物 (1/4)	6
第7図	調査地点と周辺の地形 (1/4000)	7
第8図	遺構分布図 (1/300)	8
第9図	1号住居址 (1/60)	9
第10図	2号住居址 (1/60)	10
第11図	3号住居址 (1/60)	10
第12図	住居址出土遺物 (1/3)	11

第Ⅰ章 新邸遺跡第2地点の調査

第1節 調査の経緯

(1) 調査に至る経過

昭和61年11月4日、志木市建設部建設課より志木市教育委員会に、志木市柏町5丁目2996-1の共同住宅建設計画に係る埋蔵文化財の取り扱いについて照会があった。

該当地は、志木市No8遺跡内にあり、事前に記録保存のための発掘調査が必要である旨を伝え、開発当事者である個人と協議を行った。

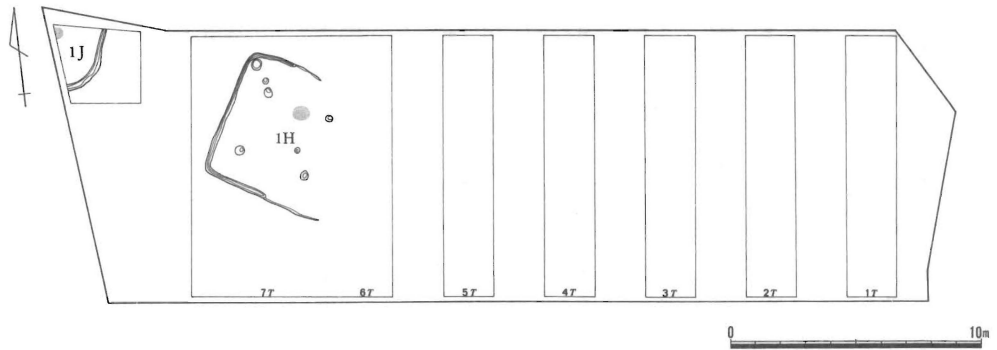
教育委員会では、個人より埋蔵文化財発掘届が提出されたため、発掘主体として志木市遺跡調査会を斡旋した。遺跡調査会はこれを受け、埋蔵文化財保存事業委託契約を締結し、11月11日から発掘調査を開始した。なお調査面積は350㎡であった。(委保第5-1715)

(2) 遺跡の立地と環境

志木市は埼玉県の南東部に位置する。市域は北東部に荒川(旧入間川水系)の形成した沖積地が



第1図 調査地点と周辺の地形 (1/4000)



第2図 遺構分布図 (1/300)

広がり、北西部には狭山丘陵に源を発する柳瀬川が北東流する。南半は武蔵野台地の縁辺部にあたり、南西から北東にかけてゆるやかに傾斜する。

新邸遺跡は、北西に柳瀬川を見下す台地縁辺部に位置し、標高約14m、低地との比高差7m前後を測る。

(3) 発掘調査の経過

発掘調査は11月11日から開始した。調査該当地は駐車場として使用されていたため、土が固められており、しかも砂利が入られた状態であったので、表土剥ぎはバックホーを使用して行った。

調査は2m幅のトレンチを設定し、東側から順次遺構確認作業を実施した。その結果、7トレンチを中心にして黒褐色土の落ち込みが確認されたため周囲を拡張したが、ほぼ正方形のプランを呈する古墳時代前期の住居址であることが判明した。また、調査区の北西隅には、昨年度一部分調査した縄文時代前期の住居址の続きが検出されたが、今回も部分的なものであった。12日からは2軒の住居址の精査を開始し、実測・写真などの記録を行い、17日には埋め戻しを完了した。

第2節 検出された遺構と遺物

(1) 縄文時代

1号住居址 (第3図)

大部分が調査区外にあり、規模・平面形は不明である。壁は急斜に立ち上がり深さ20cm前後を測る。壁溝は幅14~20cm、深さ3~7cmを測る。床面は貝層の堆積している部分がよく固められている。炉は楕円形を呈すると思われる地床炉で、4cm程の掘り込みを有する。覆土は1層—表土、2層—ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む黒褐色土、3層—マガキを含む混貝土層、4層—ヤマトシジミを主体とする純貝層、5層—マガキ主体の純貝層、6層—ローム粒子を多く含む暗褐色土、7層—ローム粒子を多く含む暗黄褐色土となる。なお貝層中には、オオタニシ・アサリ・ハマグリ・サルボウが僅かに含まれている。遺物は貝層の上・中・下からあるが多くない。本住居址の時期は出土した土器から黒浜式期と考えられる。

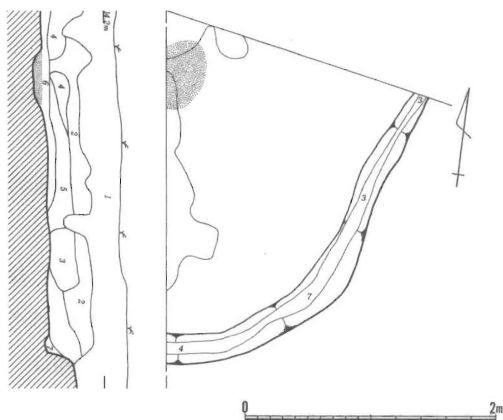
1号住居址出土遺物（第4図）

1は波状口縁の土器。波頂部口唇上には刻みが加えられる。口縁部に広い無文部をもち、以下、反撚りの無節斜縄文が施されるが、施文時に土器の乾燥が進んでいたためか、その施文は浅い。

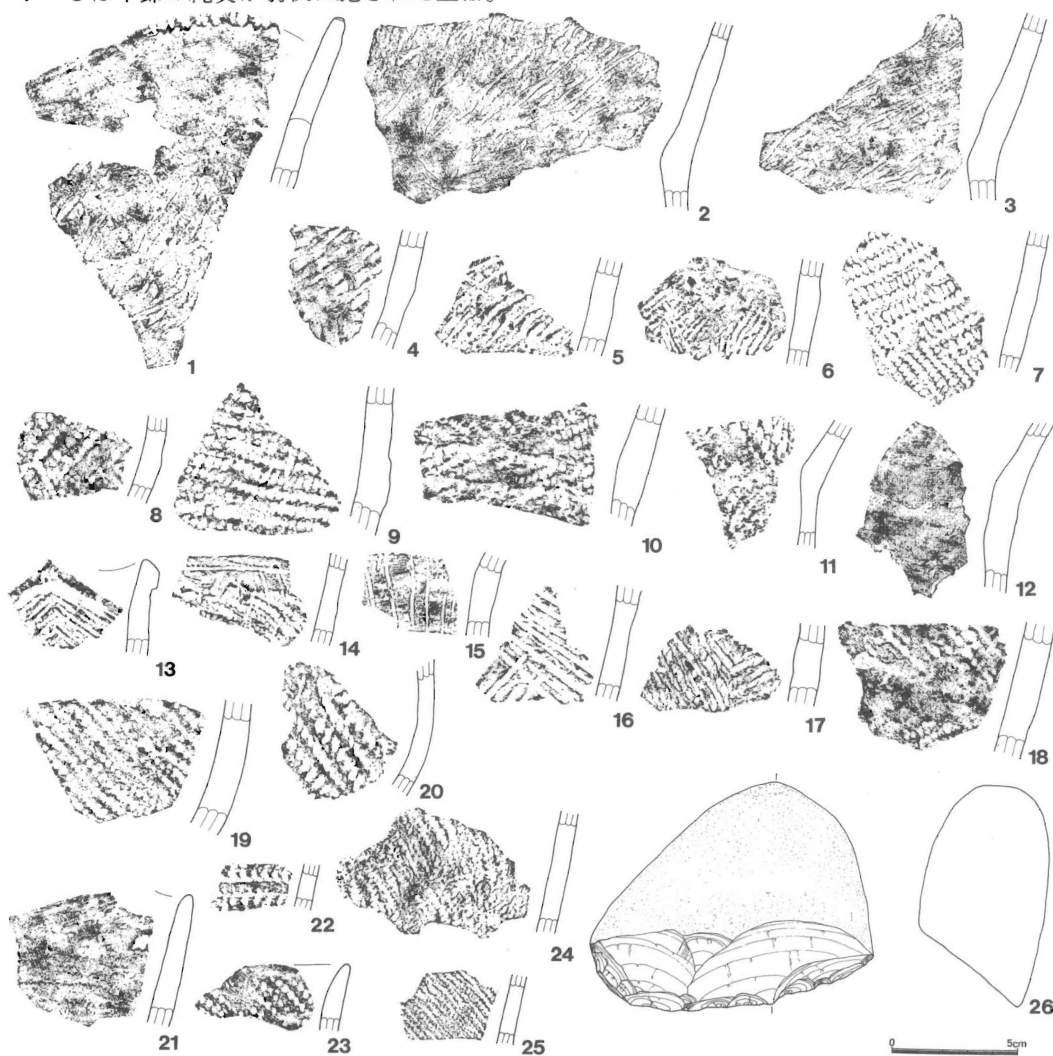
2・3は同一個体と思われる土器で、胴部が屈曲し外反する器形をもつ。器面には反撚りの無節斜縄文が施される。

4～6は無節の斜縄文が施された土器。6は一部方向を変えて二重施文している。

7・8は単節の縄文が羽状に施された土器。



第3図 1号住居址 (1/60)



第4図 1号住居址出土遺物 (1/3)

二種類の縄文原体を使用している。

9～11は単節の斜縄文が施された土器。

12は無文の土器であるが、2・3の土器の縄文の施されなかった部分かもしれない。

以上の土器は貝層中から検出されたもので、胎土中には多量に繊維を含む。黒浜式土器であろう。

13は波頂部が尖る波状口縁の土器で口唇部は肥厚する。半截竹管による集合した平行沈線が、口縁に沿うように山形に施される。

14～16は沈線により文様が描かれた土器。14は平行沈線が器面を巡り、そこから短い平行沈線が垂下する。それ以下は単節の斜縄文が施される。15は沈線が多条に垂下される。16は集合する沈線が鋸歯状に施される。これらの土器の沈線は、半截竹管によるものではない。

17は無節の縄文が羽状に施された土器である。

18は単節の縄文が羽状に施される土器であるが、羽状になる中間部分は無文帯となる。

19・20は単節の斜縄文が施される。

21は波状口縁の無文の土器である。

以上の土器は貝層上の出土で、胎土中には多量に繊維を含む。黒浜式土器であろう。

22は連続爪形文が施される土器。

23～25は単節の斜縄文が施された土器。23は平縁の口縁部破片である。

以上の土器は貝層上の出土で、胎土中に繊維を含まない。諸磯a式土器であろう。

26は貝層下出土の硬砂岩製と思われる片刃の礫器。刃部は磨耗が激しい。

(2) 古墳時代

1号住居址 (第5図)

東壁を破壊されているが、平面形は正方形を呈するものと思われ、一辺5.4m前後を測る。壁は急斜に立ち上がり、北壁で15cm、南壁で25cm前後の深さを測る。壁溝は西壁全体と北壁・南壁の半ばにあり、幅10～15cm、深さ2～5cmを測る。床は北西・南東のコーナー部分(一点鎖線の中)に硬化部分がある。炉は北側の2本の支柱穴のほぼ中間にあり、60×55cmの楕円形を呈する地床炉で2cmの掘り込みを有する。支柱穴はコーナー部にある深さ50cm以上の4本が相当し、他のピットは後世のものである。覆土は黒褐色土を基調とし、自然堆積状態を呈する。また、焼土・炭化物を多く含み、床面上にも炭化材が散乱するなど焼失家屋であった可能性が強い。遺物はさほど多くないが、住居の南側に集中する傾向がある。本住居址の時期は、出土した土器から五領式期と考えられる。

1号住居址出土遺物 (第6図)

壺形土器 (1・2)

1は複合口縁の土器で、頸部は「く」字状に屈曲し直線的に外反する。口縁部は内面に稜をもち僅かに内湾しながら開く。外面はハケ目を残し、内面はヘラナデされる。

2は球状の胴部をもち、頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は直線的に開く。肩部内面には輪積み痕を残す。外面はヘラ磨き、内面はナデられる。

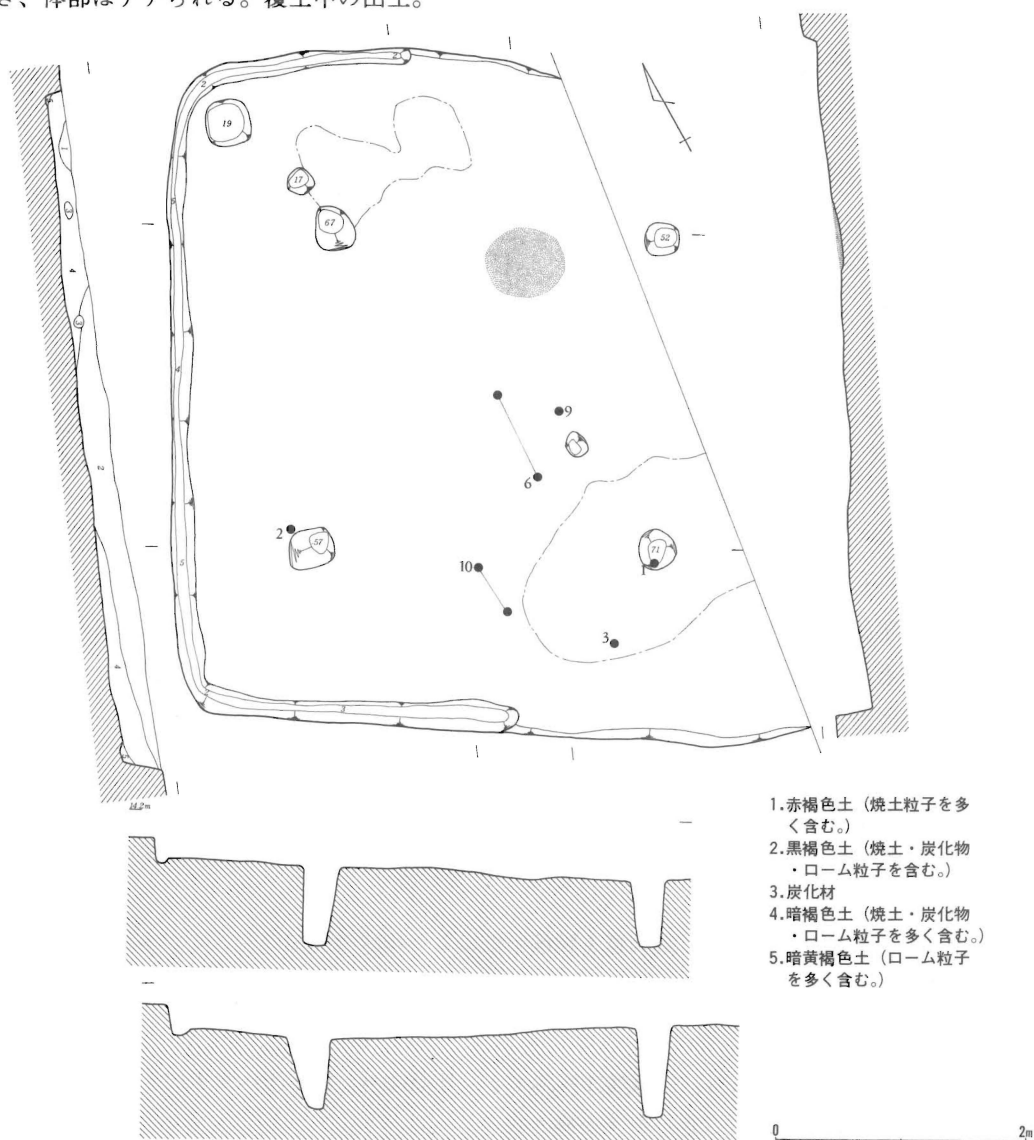
坩形土器 (3)

3は丸底の底部から内湾しながら立ち上がり、頸部でくびれ、口縁部は直線的に開く。内外面ともナデられる。

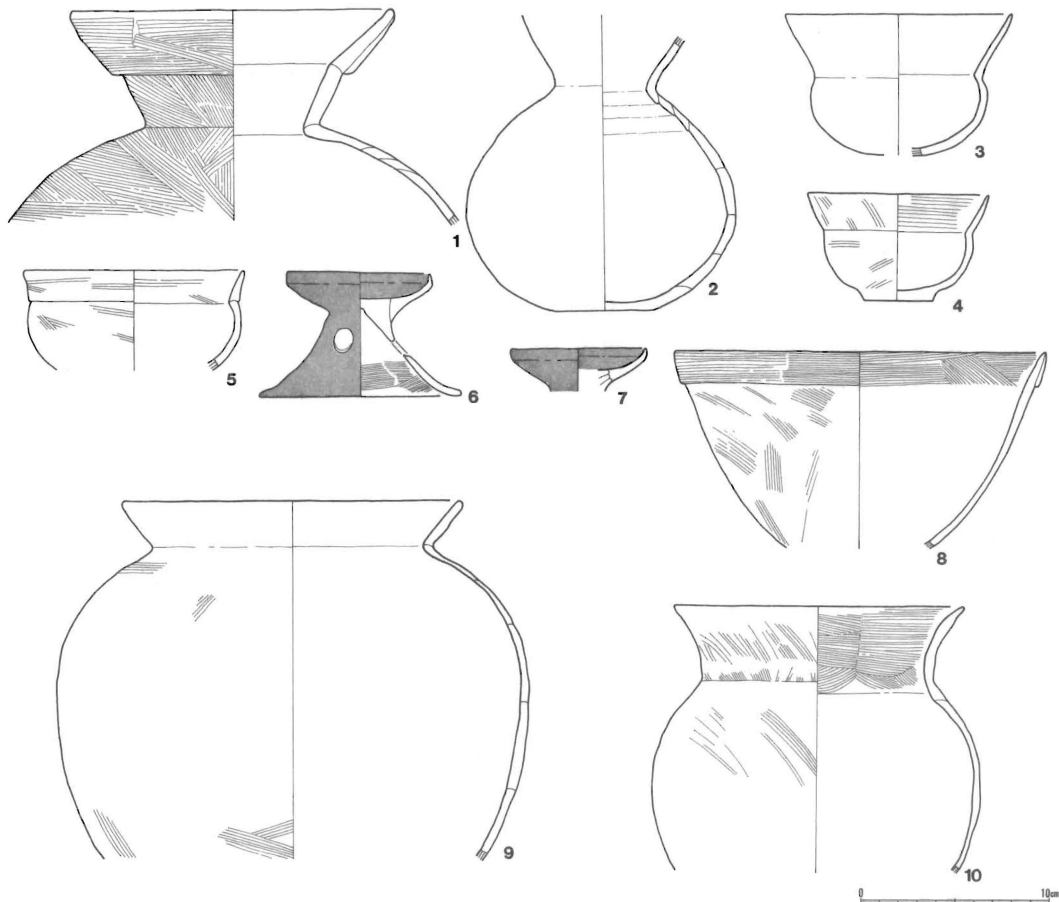
埴形土器 (4・5)

4は平底の底部から内湾しながら立ち上がり、頸部でくびれ、口縁部は僅かに内湾しながら開く。外面はハケ整形後ていねいにヘラ磨きされ光沢をおびる。口縁部内面はヘラ磨きされるがハケ目を残す。体部内面もヘラ磨きされる。覆土中の出土。

5は内湾する体部から頸部が屈曲し、複合口縁状の口縁は外反する。外面は口縁部がハケ整形後横ナデ、体部はハケ整形後ていねいにヘラ磨きされ光沢をおびる。内面は口縁部がハケ整形後ヘラ磨き、体部はナデられる。覆土中の出土。



第5図 1号住居址 (1/60)



第6図 1号住居址出土遺物 (1/4)

器台形土器 (6・7)

6は受部口縁部が直立ぎみに立ち、脚台部は「ハ」字状に大きく開く。脚台部には3孔が穿たれる。受部内外面、脚台部外面はヘラ磨き後赤彩される。脚台部内面にはハケ目を残す。

7は受部が内湾しながら開く。内外面はヘラ磨き後赤彩される。覆土中の出土。

鉢形土器 (8)

高坏形土器の可能性をもつ。碗状の形状を呈し、口縁部は複合口縁となる。口縁部内外面はハケ整形、体部内外面はていねいにヘラ磨きされるが、外面には部分的にハケ目を残す。覆土中の出土。

甕形土器 (9・10)

9は台が付くと思われる土器。最大径を胴部中位にもつ球状の胴部から「く」字状に屈曲した頸部を経て、直線的に開く口縁部に至る。内外面ともヘラナデされるが、外面には部分的にハケ目を残す。煤の付着が著しい。

10は球状を呈する胴部をもち、口縁部は外湾する。外面はハケ整形後ヘラナデされる。内面は口縁部はハケ整形、胴部は磨きに近いナデが施される。

第Ⅱ章 西原大塚遺跡第4地点の調査

第1節 調査の経緯

(1) 調査に至る経過

昭和61年12月23日、志木市幸町3丁目3113-1地内に共同住宅が建設されることが判明した。当地は、志木市No.7遺跡として周知の埋蔵文化財包蔵地の中に含まれていたため、志木市教育委員会では開発当事者である個人に事前に記録保存のための発掘調査が必要なことを伝え協議を行った。

12月25日、個人より埋蔵文化財発掘届が提出されたため、教育委員会では発掘主体として志木市遺跡調査会を斡旋した。遺跡調査会ではこれを受け、埋蔵文化財委託契約を締結し、発掘調査にかかった。(委保第5-321)

(2) 遺跡の立地と環境

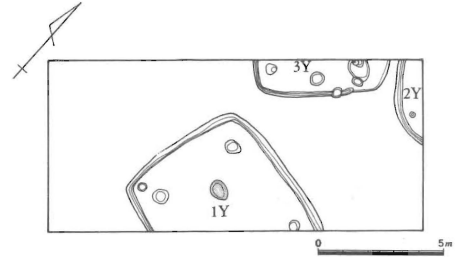
西原大塚遺跡は、東武東上線志木駅の西方900mの地点に位置し、面積約165000㎡に及ぶ市域最



第7図 調査地点と周辺の地形 (1/4000)

大の集落址で、縄文時代中期、弥生時代後期、古墳時代前・後期の複合遺跡である。

遺跡は、市の西を北東流する柳瀬川の開析した低地を臨む台地上にある。遺跡の標高は14~17mと比較的高低差があり、西方向に傾斜をもつ。今回の調査地点は標高約14.7m、低地との比高差約6mを測る。



第8図 遺構分布図 (1/300)

(3) 発掘調査の経過

発掘調査は、雪のちらつく昭和62年1月5日から開始した。バックホーにより耕作土を除去した後、遺構確認作業を行った。その結果、3ヶ所に住居址と思われる落ち込みを検出したが、いずれも部分的に調査区外に伸びており、完掘できない状態であった。

1・2号住居址は7日から調査を始め、9日には写真撮影・実測を完了した。また、3号住居址は8日から掘り始め、10日午前中には写真撮影・実測を終え、午後には埋め戻しを行い発掘調査を終了した。

第2節 検出された遺構と遺物

(1) 弥生時代

1号住居址 (第9図)

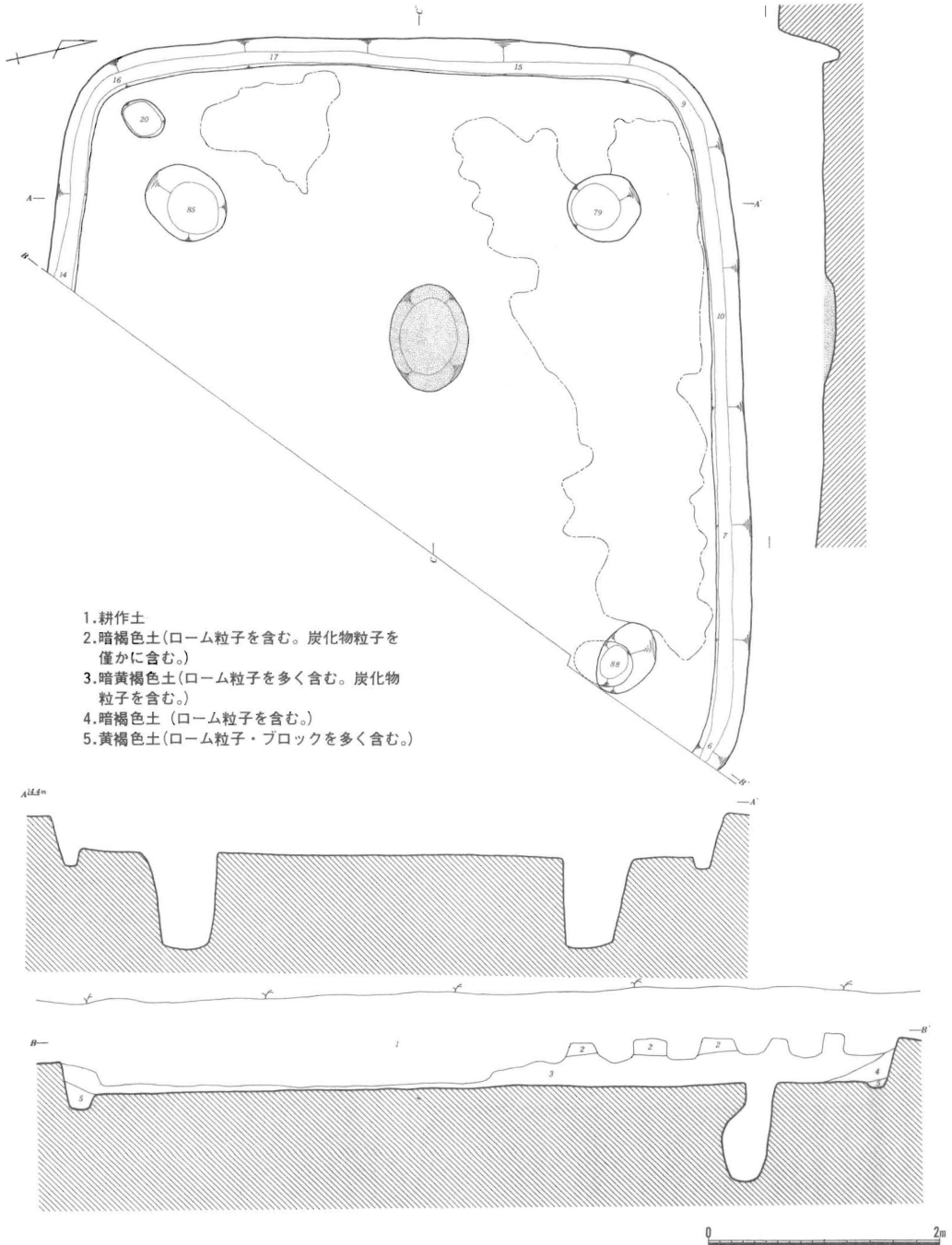
東半は調査区外にある。平面形はほぼ東西に長軸をもつ隅丸長方形を呈するものと思われ、短辺6m前後を測る。壁は急斜に立ち上がり、30cm前後の高さをもつ。壁溝は調査した部分では全周し、幅20~25cm、深さ6~17cmを測る。床面は全体に良好であるが、住居北側が特によく踏み固められている(一点鎖線内部)。炉は住居中央から西に偏っており、95×65cmの楕円形を呈する地床炉で8cm前後の掘り込みを有する。ピットは4本検出されたが、深度のある3本が支柱穴であろう。覆土はローム粒子を多く含む暗黄褐色土を基調とし、自然堆積状態を呈する。遺物は土器片のみで、出土量は僅かであった。本住居址は出土した土器から、弥生時代末葉~古墳時代初頭の時期と考えられる。

1号住居址出土遺物 (第12図1~37)

壺形土器 (1~21)

1~3は口頸部破片。1は複合口縁を呈し、4本1組の棒状浮文が付され、さらに棒状浮文部を除いた下端にはヘラ状施工具による刻みが加えられる。口縁部内外面ヨコナデ、頸部は縦方向に磨きが施される。胎土には小石が含まれ、作りも粗雑である。2は単節LRの斜縄文を施す複合口縁をもち、その下端にはヘラ状施工具による刻みが加えられる。3は内外面よく磨かれているが、外面において横方向のハケ目痕が若干残る。4~21は胴部上半の破片。4は単節RLの斜縄文。5は単節の斜縄文が羽状に施され、外面には円形朱文が付されるのであろうか、内面赤彩が施される。6~8は1条の「S」字状結節文をもつ単節斜縄文を施す。9は単節RLの斜縄文を施し、沈線で山形に区画し磨り消す。文様施工部下は赤彩が施される。10~16は2条以上の「S」字状結節文を

もつ。10・11は同一個体で11は文様直下の破片である。文様は2条の「S」字状結節文と単節RLの斜縄文が施される。文様下は直下にハケ目痕が若干残るものの、縦方向のていねいな磨きが施される。内面はヘラナデ。12は3条の「S」字状結節文をはさむ2段の単節斜縄文を施した後、2個の円形浮文を付す。17・18は同一個体で2段の網目状撚糸文がみられる。19・20も同一個体で櫛歯状施文具による横線文がみられる。文様下はていねいに磨かれ、赤彩が施される。又、内面には土器



第9図 1号住居址 (1/60)

成形時に付いたと思われる指紋が観察できる。21は外面が斜位の磨き、内面が横方向のハケ目調整後、下部がヘラナデにより消されている。

甕形土器 (22~25・27~34)

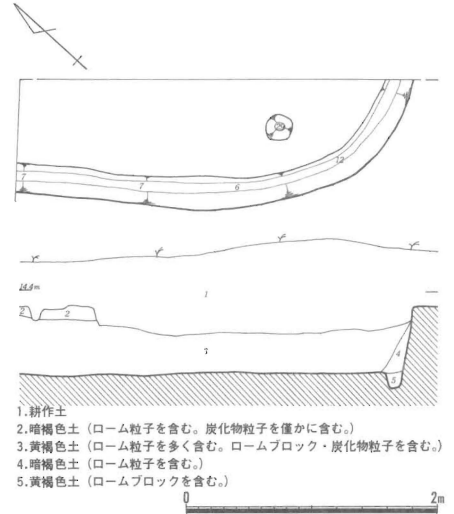
22~25は口縁部破片。22は口唇部に外面単方向からの押捺が施され、3段の輪積み痕がみられる。23は口縁屈曲部が輪積みに沿って剥落したもので、内外面ハケ目調整後、ヨコナデにより若干消されている。24は内外面ハケ目調整が施される。25は口唇部に外面単方向からハケ状施文具により刻みが施される。27は2段の輪積み痕がみられる。28~30は胴部中位~下半にかけての破片であり、24を加えて同一個体と思われる。28~30は外面ハケ目調整、内面ヘラナデが施される。31~34は脚台部破片。いずれも脚端部が内面に折り返しをもつ。31は外面ハケ目調整後、若干ナデ消されている。内面はヘラナデ。32は内外面ヘラナデが施される。33は外面ハケ目調整、内面ヘラナデが施される。34は外面が縦方向、内面が横方向にハケ目調整が施される。

鉢形土器 (26)

口縁部破片で丸味をもつ口唇部に内湾ぎみの器形を呈する。調整は口唇部付近内外面ヨコナデ、以下磨きが施される。

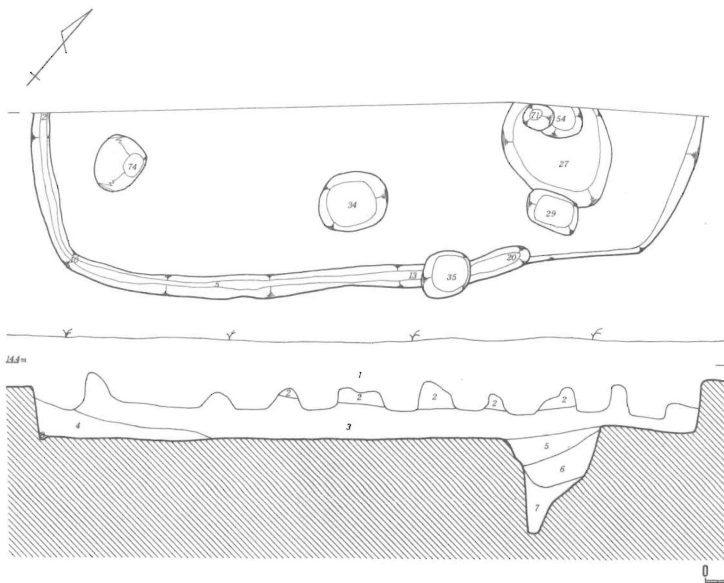
高環形土器 (35~37)

いずれも脚台部破片である。36・37は外面赤彩が施され、内面においては赤色顔料の付着がみられる。又、内面調整は粗雑なハケ目痕を残すなど相似ている。外面調整は36は縦方向によく磨かれているが、37はハケ目痕を



第10図 2号住居址 (1/60)

- 1. 耕作土
- 2. 暗褐色土 (ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。)
- 3. 黄褐色土 (ローム粒子を多く含む。ロームブロック・炭化物粒子を含む。)
- 4. 暗褐色土 (ローム粒子を含む。)
- 5. 黄褐色土 (ロームブロックを含む。)



第11図 3号住居址 (1/60)

- 1. 耕作土
- 2. 黒褐色土 (ローム粒子を僅かに含む。)
- 3. 暗褐色土 (ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。)
- 4. 暗黄褐色土 (ローム粒子・ブロックを多く含む。)
- 5. 暗茶褐色土 (ローム粒子を多く含む。)
- 6. 黒褐色土 (ローム粒子を僅かに含む。)
- 7. 暗茶褐色土 (ローム粒子・ブロックを多く含む。)
- 8. 黄褐色土 (ローム粒子を多く含む。)



第12図 住居址出土遺物 (1/3)

残している。

2号住居址（第10図）

南側コーナー部のみの調査に終わった。壁は急斜に立ち上がり、高さ50cm前後を測る。壁溝は調査した部分では全周し、幅15cm前後、深さ6～12cmを測る。床面は壁際を除きよく踏み固められている。ピットは1本検出された。覆土はローム粒子を多く含む黄褐色土を基調とする。遺物の出土は僅かであった。本住居址は出土した土器から、弥生時代末葉～古墳時代初頭の時期と考えられる。

2号住居址出土遺物（第12図38～40）

甕形土器（38・39）

甕形土器の小破片と思われる。38は外面ハケ目調整、内面ヘラナデが施される。39は内外面ハケ目痕を残している。

石製品（40）

砥石。石質は凝灰岩で使用されているのは両側面を含めた4面である。図面上では上側が欠損しており、下側の面には鋭い刃物による切り込みの痕跡を窺うことができる。又、使用面はよく使われたらしく窪みをもつ。床面上の出土である。

3号住居址（第11図）

住居北西部の大部分が調査区外にあり、一辺約5.3mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、40cm前後の高さをもつ。壁溝は南西壁と南東壁にあり、幅5～10cm、深さ2～20cmを測る。床面は部分的に硬化面が認められた。ピットは6本検出されたが、深度のあるコーナー部の2本が支柱穴となろう。覆土はローム粒子を多く含む暗褐色土を基調とする。遺物の出土は僅かであった。本住居址の時期は出土した土器から、弥生時代末葉～古墳時代初頭と考えられる。

3号住居址出土遺物（第12図41～52）

壺形土器（41～43）

41は複合口縁をもち、下端に土器成形時に付いたと思われる指頭圧痕がみられる。42は胴部破片で外面はハケ目調整後、赤彩が施される。43は胴部上半の破片で3段の単節羽状縄文と刺突文列、櫛歯状施文具による回転文（ $\frac{1}{4}$ 同心円文）がみられる。調整は外面文様下が磨き、内面はナデ。

甕形土器（44～51）

44～46は口縁部破片。44・46は同一個体で口唇部にハケ目状施文具による刻みをもち、内外面ハケ目調整が施される。45は「く」字状に外反する器形をもち、内外面ハケ目痕を残す。47は胴部破片で外面ハケ目調整。内面ヘラナデが施される。48～50は脚台部破片。いずれも内面調整はヘラナデ。外面調整は48が粗雑なハケ目調整。49・50はナデが施される。又、49・50は脚端部が内側に折り返されている。51は平底の底部である。底部からの立ち上がり付近ではハケ目痕が残る。

高環形土器（52）

坏部と脚台部との接合部では隆帯が巡る。隆帯は貼り付けた後、上下にヨコナデを加え、接合を強化しているものと思われる。坏部の外面にはハケ目痕が残る。内面には煤が付着する状態である。

図

版



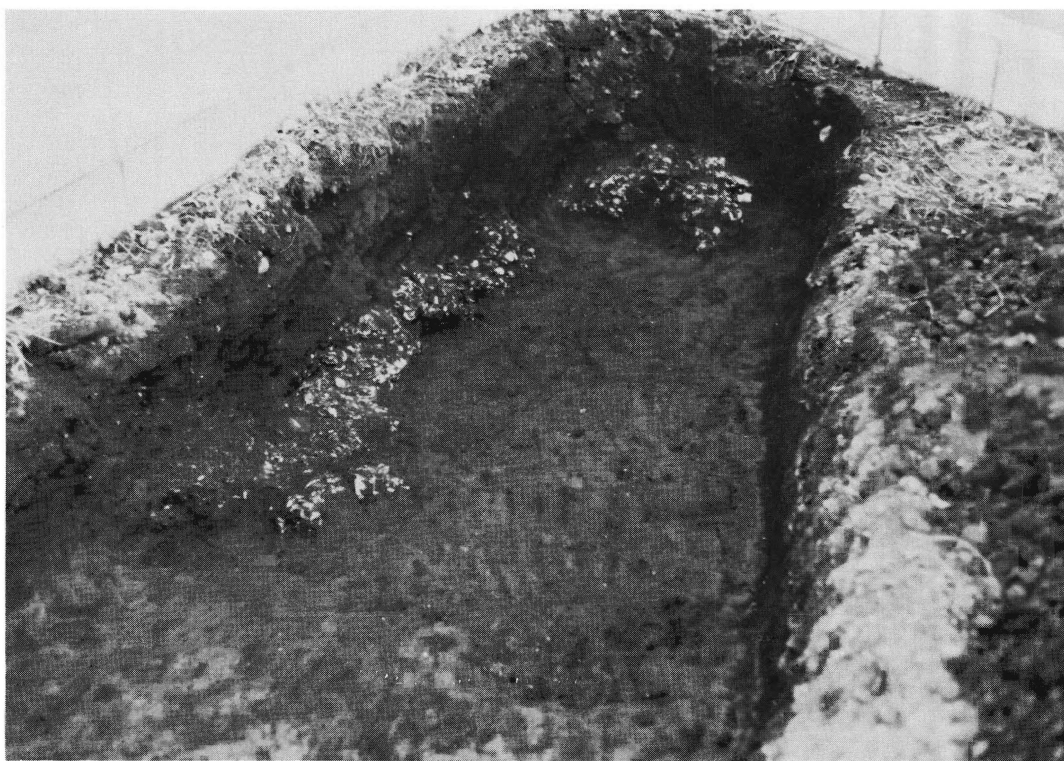
遺跡近景



調査風景



縄文時代1号住居址



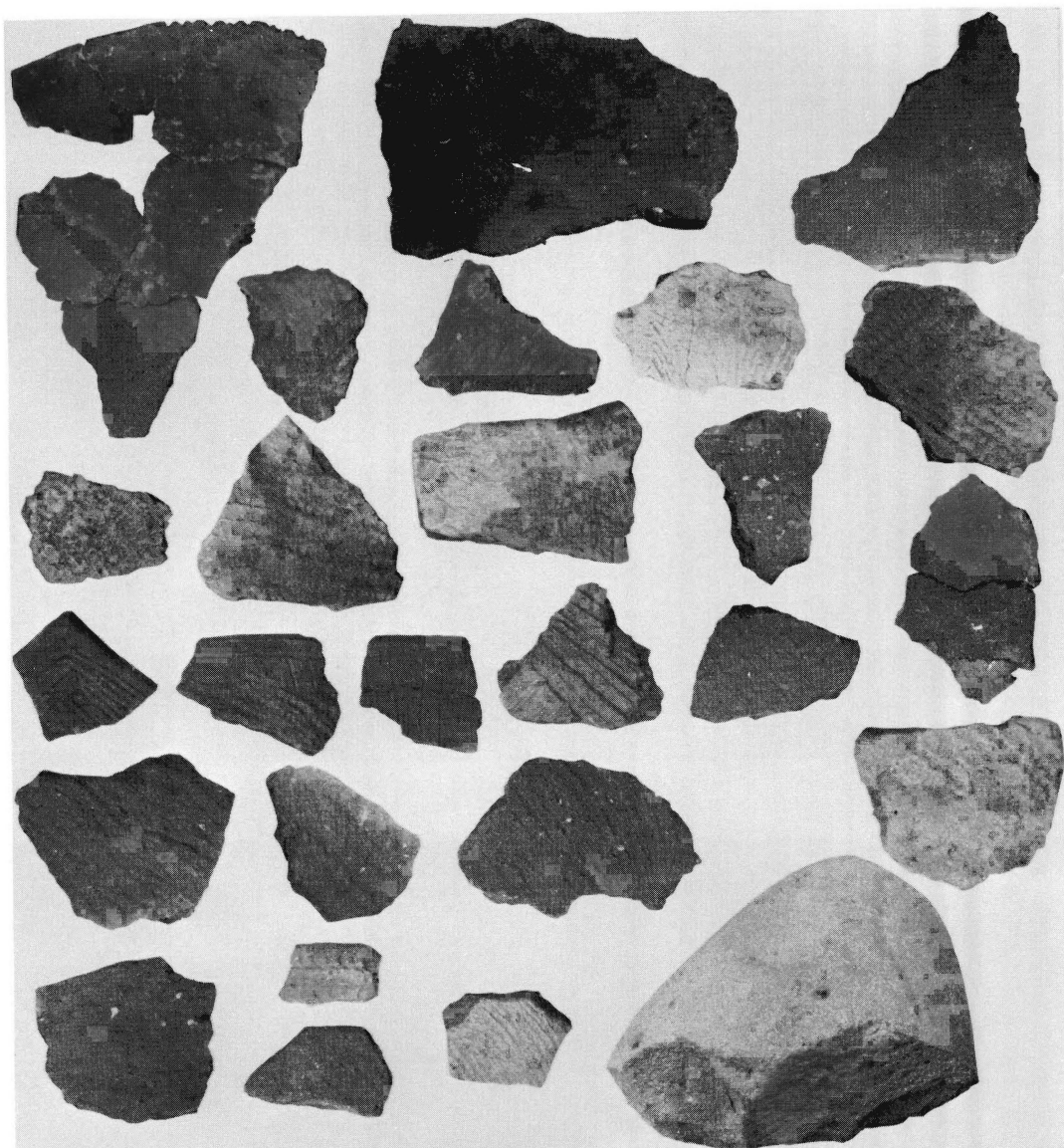
貝層



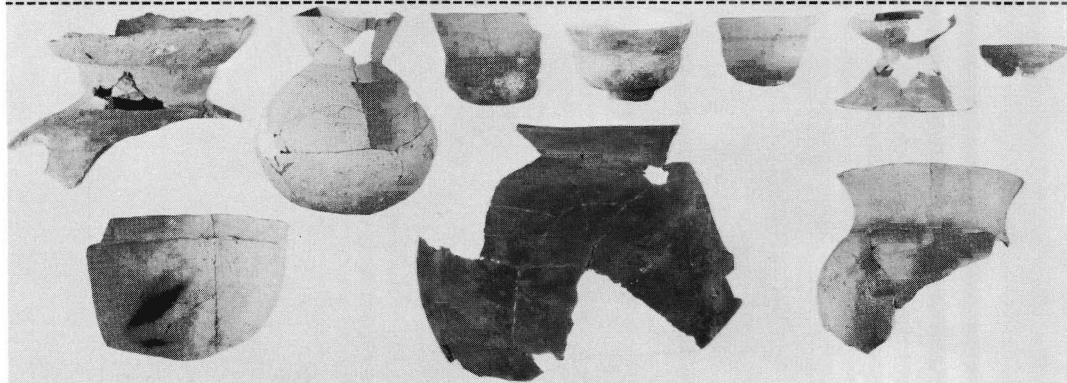
古墳時代1号住居址



遺物出土状態



縄文時代住居址出土遺物



古墳時代住居址出土遺物



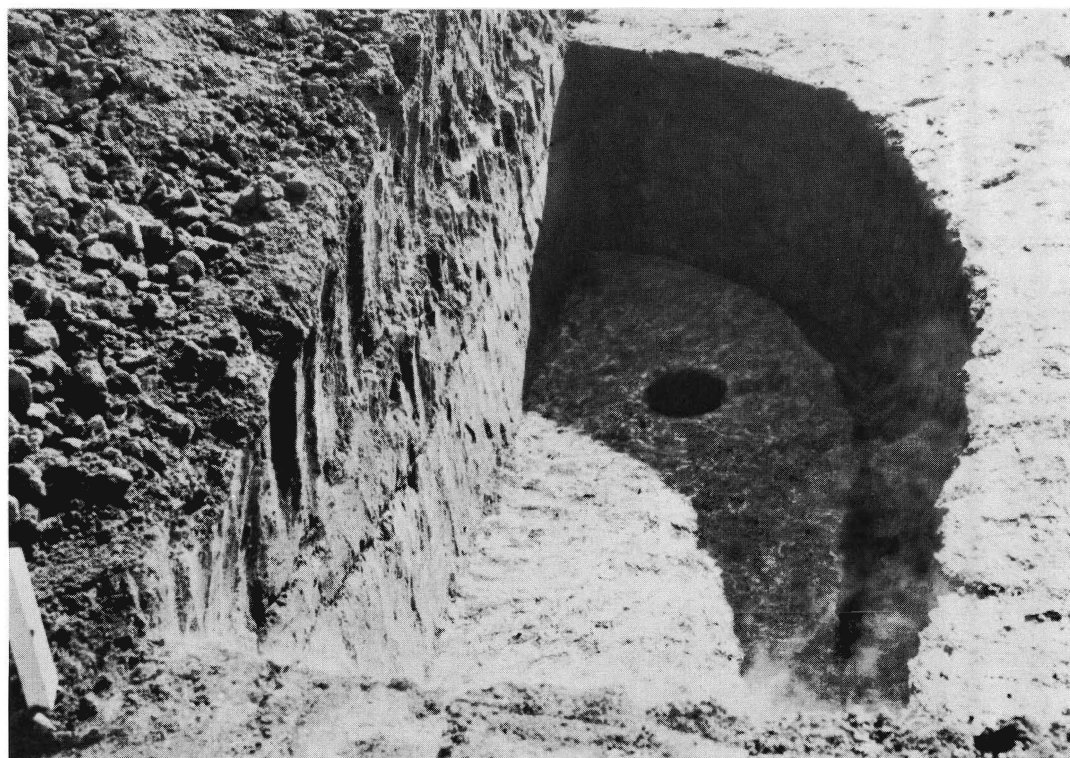
遺跡近景



調査風景



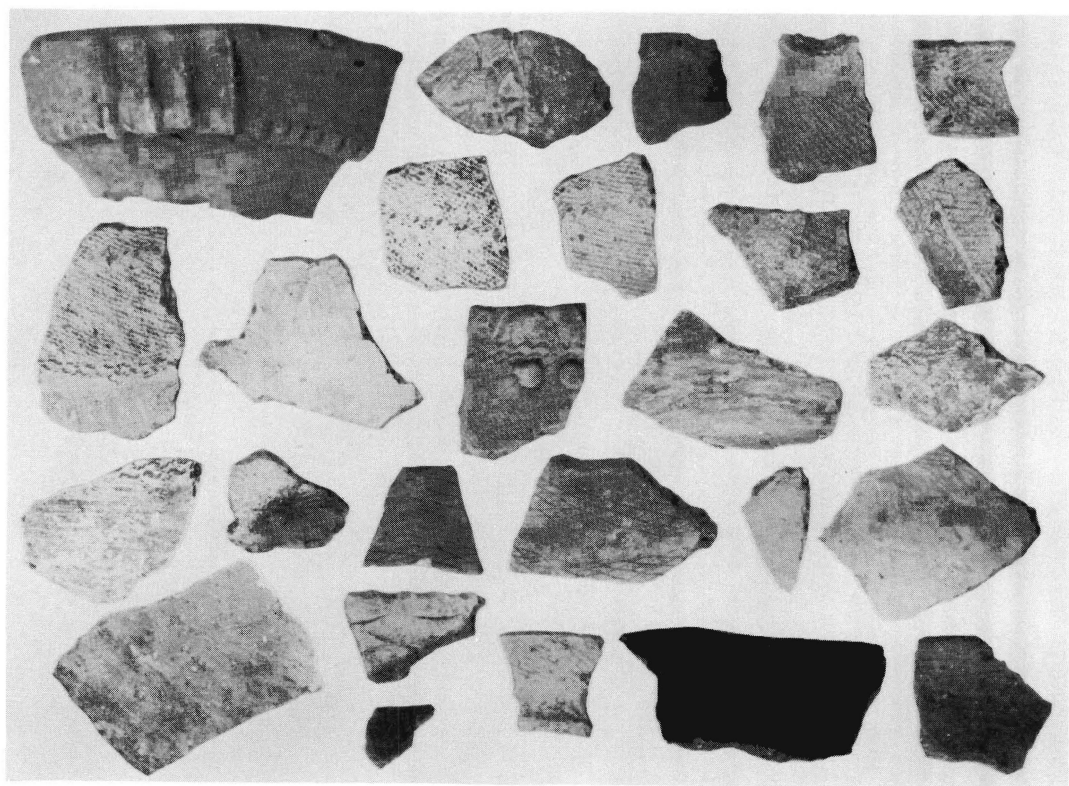
1号住居址



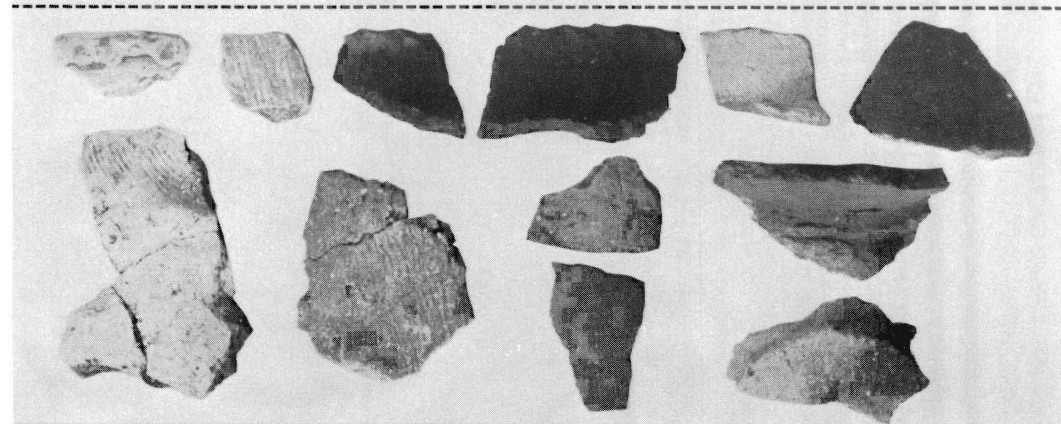
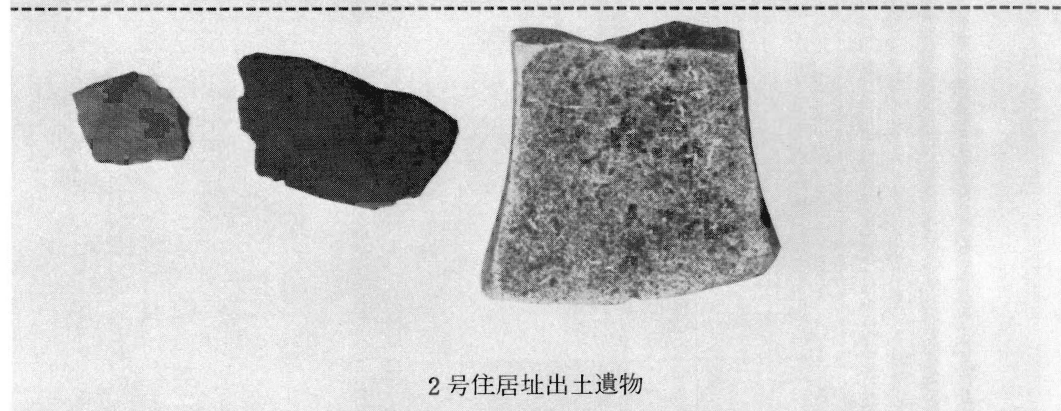
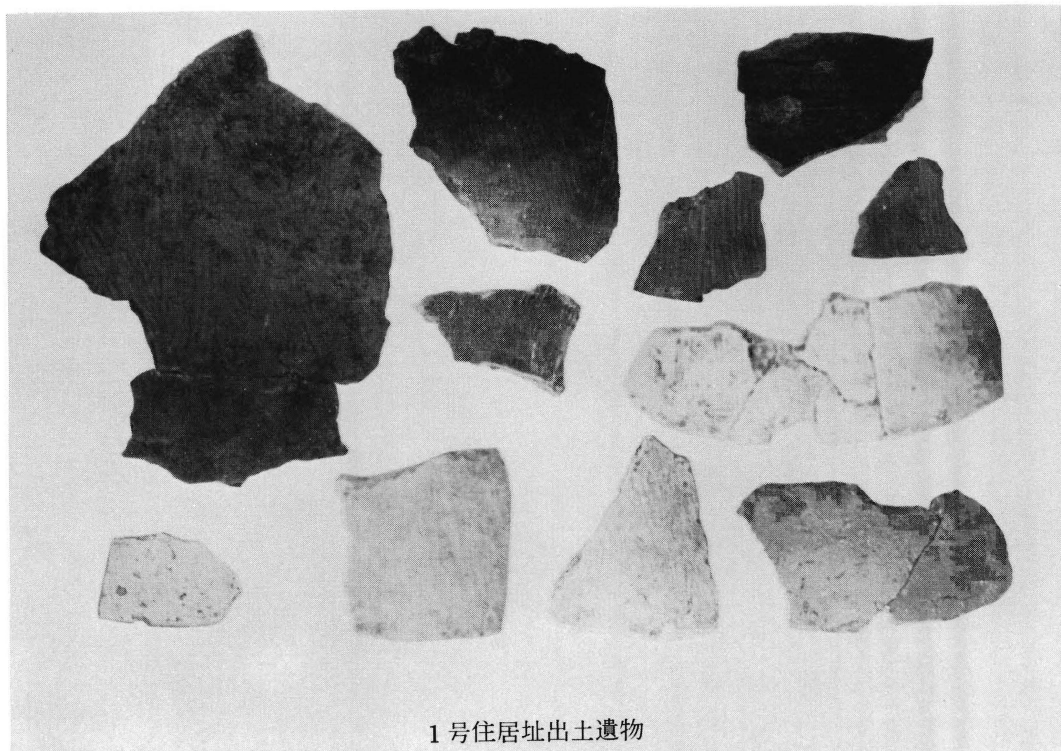
2号住居址



3号住居址



1号住居址出土遺物



志木市遺跡調査会調査報告 第3集

新 邸 遺 跡 第 2 地 点
西原大塚遺跡第4地点
発掘調査報告書

発 行 志木市遺跡調査会
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号
志木市教育委員会内

発行日 昭和62年2月28日

印 刷 梅田印刷株式会社

